

量評価のためには、SN の RI 濃度が、0.1～1.0 μCi 程度に保たれるのが望ましいと考えられた。

PA-10.

センチネルリンパ節同定による早期胃癌の縮小手術の可能性

(外科学第三)

○須藤日出男, 高木 融, 伊藤 一成,
佐々木啓成, 岡田 佳平, 片柳 創,
篠原 玄夫, 原田 佳明, 立花 慎吾,
土田 明彦, 青木 達哉, 小柳 泰久

(放射線医学)

吉村 真奈, 小泉 潔, 阿部 公彦

【目的】早期胃癌のリンパ節転移は M 癌 1～2%, SM 癌 15～20% であり, 多くの症例で予防的なリンパ節郭清が行われている。センチネルリンパ節 (癌病巣からのリンパ流を最初に受けるリンパ節, 以下 SN) と転移リンパ節の分布を検討することで SN のコンセプトによる郭清縮小の可能性を確認する。

【対象】1986 年以降当科で手術した早期胃癌 1,151 例中, リンパ節転移陽性 82 例。占居部位は U: 6, M: 41, L: 35 例, 深達度は M: 5, SM: 77 例。2000 年 8 月以降 SN を同定した 40 例。占居部位は U: 4, M: 26, L: 10 例, 深達度は M: 16, SM: 19, MP: 5 例。【方法】術前, 内視鏡下に RI を 6 時間前 1 mCi, 18 時間前 4 mCi 4ヶ所に局注し, 0.02% ID 以上を SN とした。1. 転移リンパ節と SN の分布状況を検討した。2. 転移リンパ節と SN を左胃動脈, 右胃動脈, 左胃大網動脈, 右胃大網動脈, 後胃動脈の 5 領域に分け, 占居部位別に転移リンパ節と SN の領域数を検討した。

【結果】転移リンパ節は平均 3.5 個, SN は平均 3.8 個。SN 症例でリンパ節転移陽性は 2 例で SN であった。1. 単発リンパ節転移は 39 例 48% (U: 3, M: 20, L: 16), 2 個は 13 例 16% (U: 1, M: 3, L: 9), 3 個以上は 30 例 36% (U: 2, M: 18, L: 10) であり, SN は 1 個 8 例 20% (M: 5, L: 3), 2 個 7 例 17% (U: 2, M: 3, L: 2), 3 個以上 25 例 63% (U: 2, M: 18, L: 5) であった。また, リンパ節転移は 1 群のみ 70 例 85%, 1, 2 群 7 例 9%, 2 群のみ 5 例 6% であり, SN は 1 群のみ 32 例 (80%), 1, 2 群 7 例 (17%), 2 群のみ 1 例 (3%) であった。2. リンパ節転移は 1 領域 65 例 80% (U: 5,

M: 33, L: 27), 2 領域は 16 例 18% (U: 1, M: 7, L: 8), 3 領域は M: 1 例 2% であり, SN は 1 領域 30 例 75% (U: 4, M: 18, L: 8), 2 領域 9 例 23% (M: 7, L: 2), 3 領域は M: 1 例 2% であった。

【結論】SN による胃癌縮小手術は, SN をいかに正確に同定できるかが最大の問題で, 導入は慎重にすべきであり, その際, SN を領域で考えることが重要である。

PA-11.

経鼻経胃的内視鏡的膵嚢胞ドレナージ術を施行した膵嚢胞の一例

(内科学第四)

○祖父尼 淳, 篠原 靖, 糸井 隆夫,
中村 和人, 中山 大寿, 真田 淳,
古川 雅也, 糸川 文英, 森安 史典

症例は 48 歳女性。主訴は上腹部痛。膵炎および外傷の既往はない。平成 12 年 9 月, 左上腹部に腫瘤を触知し, 近医受診。腹部 CT 検査にて膵尾部に径 18 cm の巨大嚢胞を指摘され, 当科紹介入院となった。入院後に行われた体外式腹部超音波検査では上腹部左側に単房性の巨大嚢胞を認めるものの壁の肥厚, 結節を示唆する所見はなかった。造影超音波検査では, 壁内に明らかな hypervascular な血流信号を認めなかった。また腹部造影 CT 検査においても単房性の嚢胞で嚢胞内に壁肥厚や結節, debris の所見を認めなかった。超音波内視鏡検査においても明らかな壁肥厚および結節を認めず, 嚢胞と胃壁の距離も 2.7 mm と 10 mm 以内であった。以上の検査所見より非腫瘍性膵嚢胞 (膵仮性嚢胞) と診断。内視鏡的膵嚢胞ドレナージの適応と考え, 平成 12 年 12 月 ■■■ に経鼻経胃的内視鏡的膵嚢胞ドレナージ術を施行した。ドレナージ・チューブよりの排液流出も良好で, 術後 27 日目には嚢胞内腔は 18 mm 大まで縮小した (総排液量は 1,300 ml)。術後の嚢胞内容液の細胞診にて悪性所見を認めず, 排液もなくなったため, 嚢胞内腔の癒着をはかり, 術後 31 日目にドレナージ・チューブを抜去した。膵仮性嚢胞に対し, 内視鏡的膵嚢胞ドレナージ術が行われたが, 嚢胞の縮小が見られ, 有効な治療法であったため報告する。